

業績説明書

候補者名：溝川 藍

所属機関名：名古屋大学大学院教育発達科学研究科

※論文 15. **Mizokawa, A.**, Nakaya, M., & Nomura, A. (2024). Young children's responses to social-conventional transgressions in Japanese preschool settings. *European Journal of Educational Research*, 13(3), 1019–1029. <https://doi.org/10.12973/eu-jer.13.3.1019>

幼児期における社会慣習的違反に対する態度の発達の变化について検討を行った。幼稚園の年少、年中、年長クラスに在籍する幼児計 126 名を対象に個別調査を実施し、園生活のきまりを逸脱する他児が登場する 4 つの仮想場面を提示して、規範意識、感情反応、受容判断についての質問を行った。その結果、学年にかかわらず大半の幼児は「きまりを逸脱せず、皆と同じように行動することがよい」と判断するが、その理由は学年が上がるにつれて他者や集団を意識したものになることが示された。また、きまりの逸脱への感情反応は学年が上がるにつれて否定的になり、受容の判断は年少児でのみ感情反応と関連していた。ここから、幼児期を通して、きまりを逸脱する他者への態度は社会的かつ複雑なものになることが示唆された。

※論文 14. **Mizokawa, A.** (2022). Japanese and British children's understanding of the social function of pretend crying. *Japanese Psychological Research*, 64(1), 27–39. <https://doi.org/10.1111/jpr.12313>

嘘泣きについての認識の発達の文化差に関する検討を行った。日本と英国の幼児（5、6 歳児）計 71 名を対象に個別調査を実施し、物語の主人公が他の登場人物の前で嘘泣きをする 2 つの仮想場面を提示して、嘘泣きと本当の泣きの区別、他の登場人物の考え・行動、道徳的判断について質問を行った。その結果、日英の幼児は、どちらも嘘泣きと本当の泣きを区別し、嘘泣きをよくない行動であると判断することが示された。嘘泣きの社会的機能に関する認識には文化間で違いがあり、日本の幼児は、英国の幼児よりも、嘘泣きが他者の心配や向社会的行動を引き出すと判断していた。これらの結果をふまえて、対人認知の文化的多様性について議論された。

※論文 13. **Mizokawa, A.** & Hamana, M. (2020). Relationship of Theory of Mind and maternal emotional expressiveness with aggressive behaviours in young Japanese children: A gender-differentiated effect. *Infant and Child Development*, 29(6), e2196. <https://doi.org/10.1002/icd.2196>

幼児期において、心の理論と家庭の情動環境が、園での仲間への関係性攻撃とどのように関連しているかについて検討を行った。幼児（4, 5歳児）計51名とその母親、並びにクラス担任の保育者を対象に調査を実施した。幼児には、個別調査により、誤信念課題と語彙検査を実施した。また、質問紙調査により、母親の我が子に対する情動表出性（母親回答）と、幼児の関係性攻撃（保育者回答）を測定した。その結果、男児においてのみ、心の理論が発達しておりかつ母親が日常的に我が子にネガティブ情動を向けている場合に、より園で仲間への関係性攻撃を行うことが示された。同様の結果は女児では認められなかった。家庭の情動環境が幼児の社会性の発達に及ぼす影響に性差が生じる要因について議論された。

※論文 11. **Mizokawa, A.** & Lecce, S. (2017). Sensitivity to criticism and theory of mind: A cross cultural study on Japanese and Italian children. *European Journal of Developmental Psychology*, 14(2), 159–171. <https://doi.org/10.1080/17405629.2016.1180970>

批判的評価に対する反応と心の理論の関連の文化差に関する検討を行った。日本とイタリアの幼児（5, 6歳児）計152名を対象に、個別調査により、失敗・批判課題、誤信念課題、語彙検査を実施した。失敗・批判課題では、人形劇を通して、参加児の小さな失敗に対して教師または友人（参加者間条件）が批判的に評価する場面が提示された。場面提示後、感情反応、パフォーマンス評価、再挑戦の意欲に関する質問を行った。日本の幼児はイタリアの幼児よりも、教師からの批判的評価後にポジティブな感情を抱き、再挑戦の意欲が高いことや、二次の誤信念理解と教師からの批判的評価後の再挑戦の意欲の関連の文化間での違いが示され、批判的評価の受け止め方に影響し得る文化的要因について議論された。

※論文 4. **Mizokawa, A.** (2013). Relationships between maternal emotional expressiveness and children's sensitivity to teacher criticism. *Frontiers in Psychology*, 4, 807. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2013.00807>

母親の情動表出スタイルと幼児の教師からの批判的評価に対する反応との関連を検討した。対象は、幼児（5, 6歳児）53名とその母親であった。幼児には、個別調査により、失敗・批判課題と語彙検査を実施した。失敗・批判課題では、人形劇を通して、参加児の小さな失敗に対して教師が批判的に評価する場面が提示された。場面提示後、感情反応、パフォーマンス評価、再挑戦の意欲に関する質問を行った。母親には質問紙調査を実施し、我が子に対する情動表出性を測定した。その結果、母親が日常的に我が子にネガティブ情動を向けているほど、教師から失敗を指摘される状況において、パフォーマンスの自己評価は高いものの、失敗した活動への再挑戦の意欲は低いという自己防衛的な反応が示された。